

民主主義へのジェファースンの「信仰」 —— 政治的疎外, 自然権, プラグマティズム ——

谷 川 嘉 浩

京都大学大学院 人間・環境学研究科 共生人間学専攻
〒 606-8501 京都市左京区吉田二本松町

要旨 トマス・ジェファースンは、近代化に伴う商業化や都市化といった社会変動を経験しながら、デモクラシーという理想を追求した。それに呼応するように、リップマン、ブーアスティン、デューイという 20 世紀の思想家たちは、近代化に伴う急激な社会変化を共有していた。しかし、三者の民主主義観とジェファースンに対する距離感は明確に異なる。その点に注目することで、本稿は、民主主義が陥った苦境と原因、そして、プラグマティズムの足下に刻まれたラディカルデモクラシーの内実を明確化する。具体的には、デューイにおいては、自然権が、一種の統制的理念として機能するだけでなく、民主主義の前提たる「人民への信頼」を導入する役割を果たすことが示される。最後に、デューイ哲学にしばしば結び付けられる楽観性が、切迫感を持って自覚的に選び取られたスタイルである可能性を示す。

1. 自己統治のジレンマ、 あるいは政治の不安

トランプ政権の誕生やブレグジット、東欧・南米・東アジアなどのポピュリズムを人びとが目の当たりにした頃、森本ありの著作（2015）が呼び水となって『アメリカの反知性主義』（Hofstadter, 1963=2003）が再び注目され、歴史家の R. ホフスタッターは日本でも一躍その名が知られることになったが、彼は政治史でも著名である。彼は、その内の一冊で J. バルナップ（1744-98）の手紙を引用し、アメリカに通底する政治の不安に言及した。

政府が人民に由来するということは一般原則として立てておきましょう、しかし人民共には、お前たちには自治能力がないのだということを……教え悟らせねばなりません。（APT, 6）

バルナップは、政府の正統性の基礎を人民に置き

ながら、同時に人民を信頼しないというアメリカの建国者たちが陥ったジレンマを的確に言い当てた。「もし大衆というものが狂暴で度し難いものであり、しかも政府が彼等の投票と同意の上に築かれねばならぬとするなら、憲法制定者はいったい何をなしうるだろうか」と著者は総括する（APT, 6-7）。この自己統治ないし自律性をめぐる問題は、トマス・ジェファースン（1743-1826）を含む、アメリカの建国者たちを悩ませた（APT, 34-8）。

ホフスタッターが指摘するように、党派的感情に囚われると、私たちは、目下の経験や条件に照らして最も得心がいくと感じた伝統に基づいて、元の論争や対立を再構成する心理的傾向を持つ。それゆえ、現代の政治的問題を扱う際に、建国者たちと同じレトリックで議論してしまう（Ibid., xvii）。民主主義、連邦主義、共和主義、自己統治、自然権、自由、平等、教育、人民、報道、権力の均衡、政府による介入……確かに政治を論じる用語は 18 世紀のアメリカで出尽くしたかに見えるし、当時定式化された語彙で現代の研究者は変わらず考え続けている。そして、大方の国が民主主義体制を採用している以上、この点はアメリカに限定され

ず、日本も例外ではない。

本論では、こうした問題圏を形作るのに貢献した代表者とでもいうべき、ジェファーソンに注目する（ホフスタッターがいわゆる建国期を「ジェファーソンの時代」と呼んだことから影響力の大きさはわかる）¹⁾。ただし紙幅の関係から、一貫性の乏しさと曖昧さで知られる彼の思想（Ibid., 30）自体を対象とするのではなく、後年の思想家が彼に何を見たのかに話題を絞る。本論で扱うのは、ジョン・デューイ（1859-1952）、ウォルター・リップマン（1889-1974）、D. J. ブーアスティン（1914-2004）という互いに影響関係を持つ20世紀の知識人である²⁾。彼らが選ばれたのは、共通してジェファーソンへの言及があるだけでなく、約一世代ずつ年齢差のある彼らが重なるように生きたアメリカ社会が、ジェファーソンの目撃したのと同型の社会変動が生じた時代だと言えるからだ。

建国者の中でも最も長寿な人物の一人だったジェファーソンは、それだけ社会構造の激変を感じとり、彼なりに変化に応答することになった。彼は、金融業を批判して資本主義を警戒し、工業にも警戒感を抱き、独立自営農民によるコミュニティに期待をかけたことで知られる。それにもかかわらず、第三代大統領（1801-09）になったとき、それ以前の主張に代えて、国立銀行を導入して金融業に力を入れ、かつて反対したはずだが関税を上げ、留保しつつも工業を肯定した（APT, ch. 2）。このことは、旧来の農村ベースの閉じられた小共同体の夢を素朴には維持できないほど都市化・商業化・工業化が進む時代に、彼が生きたことを意味する。つまり、彼は、近代化に伴う社会変動を生きながら、人民の自己統治という理念を捨てず、理念と現実のギャップに対峙したのだ。

ジェファーソンの時代と対応するように、南北戦争終結から19世紀末のアメリカは、「金ぴか時代」と呼ばれる急成長を迎えていた。その時期、北部を中心とする急速な工業化によって世界一の経済大国となり、職を求めて都市部に人口が集中するだけでなく、膨大な移民がアメリカに押し寄せた³⁾。大企業が躍進して独占や寡占が進み、貧富の格差は広がる一方で、福祉制度や住宅やインフラの整備は進んでおらず、その必要性すら共有さ

れていなかった⁴⁾。そうした諸問題が十全な解決を迎える前に、「狂騒の二十年代」や「ジャズエイジ」と呼ばれる享乐的な大量消費社会が到来する。大衆社会の成立により、フロンティア開拓に基づく自己統治の理念や自律的個人像が機能不全を起こしたままに残存する一方、貧富の差がかつてなく拡がり、孤立的個人主義が蔓延した（LW5, 45-81）。デューイ、リップマン、ブーアスティンの三者が思想形成したのは、近代化に伴う諸問題が複雑化・先鋭化した時代だった。

彼らみなに共通する背景は、社会が複雑化する中で、個人が理解し、変化させ、貢献することのできる領域がひどく制約されるという感覚の拡がりである。アメリカ研究者のルイス・メナンドが言うように、19世紀以来アメリカでは、そうした制約の感覚を表現する種々の決定論が流布しており、W. ジェイムズやデューイは「人は自分自身の運命の主体である」という主張によって、その問題状況に応答した（MC, 371-2=372）⁵⁾。この同型性ゆえに、彼らにはジェファーソンに言及する必然性があり、それゆえ私たちは、ジェファーソンからの距離によって三者の思想的関係を測量することができる。そうした作業によって明確化されるのは、民主主義が陥った苦境と、その根本的な原因、そして、プラグマティズムの足下に刻まれたラディカルデモクラシーの内実である。

本論の構成は以下の通り。市民の政治能力を過大視する民主主義観にリップマンは批判的な視線を向け、ブーアスティンがその精神を継承したことを示す（第二節）。彼らはジェファーソンこそ人民主権という神話の創作者だと暗示したのに対し、デューイは積極的に彼の知的遺産を継承したと指摘する（第三節）。その上で、信仰概念を中心にデューイのジェファーソン論を検討して、自然権が「理想」として機能すること（第四節）、さらに、「人民への信頼」を議論の前提としたことを集中的に検討する（第五節）。最後に、彼らの民主主義論が、ジェイムズやローティの哲学的構想と共有するものに目を向けることで、デューイ哲学にしばしば結びつけられる楽観性が、切迫感を持って自覚的に選び取られたスタイルであることを明らかにする（第六節）。

2. 過大な期待と主権の神話 ——リップマンとブーアスティン

リップマンは、市民教育の標準的な教科書を読んだとき、そこでは、百科全書編纂者並みの貪欲さと、それに先立つ無際限な時間が要求されているようだと思感を述べた。市民は、生計をたて、場合によると子育てをし、地域社会や友人を気遣いつつ日々を暮らす。それと並行して、市民は、家庭・地方自治体・国・国際関係など様々な規模で、労働・輸送・金融・食料・環境など数限りない問題について知り、市民として適切な判断をなすべきだと求められている（TPP, 14=17）。当惑させる世界中の出来事の成り行きについて、市民は、情報公開や報道で知らされ続けることになっている。裏を返せば、差別や内部告発、政治家の不正や暴言に至るまで、ありとあらゆる問題に注意を向け、権力者を監視し、政治参加に努めるような無限の公共心を持つ市民が前提されている。しかし、その期待は過大だとリップマンは考えた。「市民が公的問題に割く時間はわずかしかなく、事実は無頓着であり、理論への欲求は貧弱にほかならない」という「決定的事実」を無視することで、市民への過大な要求は成立しているからだ（TPP, 14=18）。⁶⁾

原因は、社会の複雑化による市民の政治能力の過大視だけではない。それに伴って生じた、統治からの疎外にリップマンは言及する。全体を見通すことができない状況下では、《市民は、理論的には統治者でありながら、実質的に関与していない意思決定に縛られる》という問題である。すなわち、投票の際に「市民は、依然として自分が理論上の統治者であることを自覚する」一方で、自分が、無数の公務員から成る中央政府や地方自治体という複雑な官僚機構を作ったわけでもなく、その作業を見た経験はないに等しく、彼らの仕事や意思決定を決めてもいない事柄を意識させられる（TPP, 30=29）。「たまに投票ブースに立つとき、彼は現実的な選択肢を見分け、理解できる何かを約束する政党を支持する、ごく知的で公共心のある投票者となる」のだが、それはカリカチュアでし

かない（TPP, 30-1=29-30）。実際の統治は妥協に満ちており、一般市民の目の届かないところで、資本家・政治家・公務員・有力者・専門家などによって決定されている⁷⁾。

舞台にいるはずの自分たちは何も知らず、関われることもないまま、舞台裏ですべてが行われる。政治からの疎外によって、政治の有効感覚が失われた状況下では、ある種のシニズムが蔓延してしまう。リップマンは、複雑化した社会で抜がったシラケの感覚を、「魔法が解けた人」のストーリーにまとめた。

彼は、今起こっていることに、どういうわけか影響されている自分に気づく。様々な規則や規制は絶えず、いくつもの税金は年々、戦争はその都度、情勢という大きな流れに押し運ばれているということを彼に思い出させる。

それでも、こうした公的な事柄は、一切納得いかずとも彼の事柄である。そのほとんどは目に見えない。多少なりともそれらが扱われるとして、それは遠く離れた中央で、舞台裏から、誰ともわからない権力によって処理されている。私人として、彼は何が起こっているのか、誰がそれをしているのか、その事柄はどこに自分を連れていくのかについて、確かなことがわからない。（中略）しばしば、彼の理想は環境とかけ離れていて、演説を聞き、意見を述べ、投票をしても、彼を取り巻く環境を左右することができないことに気づく。彼は、自分が見通し理解し指図できない世界に生きている。（TPP, 3-4=9-10）

社会の複雑化に伴う統治機構の巨大化・複雑化が、市民を具体的な政治から疎外し、シニカルな不能感をもたらすのだ。

リップマンは、政治的疎外の背後に、アリストテレス以来ずっと政治学が憑かれてきた問題を見ていた。「環境は複雑である。人間の政治能力は単純である。それらの間に何らかの橋を架けることはできるのか」という問題である（TPP, 68=56）。

共同体は、市民の能力に見合う程度に、単純

かつ小規模に保たねばならないと述べることで、アリストテレスはその問いに答えた。〈大社会〉⁸⁾に生きる私たちは、その助言に従うことはできない。正統的民主主義者は、〔市民の〕世論に限りない政治能力があると想定することで、アリストテレスの問題に応答した。一世紀に亘る〔アメリカの〕経験から、私たちはその想定を否定せざるをえない。とすれば、私たちは古くからの問いに答えられていないことになる。私たちは、アリストテレスのように大社会を拒絶することも、民主主義者がしたように市民の政治能力を過大視することもできないのだ。(TPP, 68-9=56)

建国者たちは、市民が自己統治の能力が十分であると前提することで、伝統的な課題に回答した。しかし、リップマンの考えでは、能力の過大視は人間の有限性を無視した神話にはかならなかった(Ibid.)。

大社会に生き、翻弄される人民という実情から政治について考えねばならないというリップマンの指摘に共鳴したのが、政治史・政治思想に通暁している歴史家のダニエル・ブーアスティンである⁹⁾。彼はプラグマティズムの社会哲学に共鳴し、その伝統の延長に自身を位置づけた(Boorstin, 1969, ch. 5; cf. 谷川, 2018)。彼の考えでは、広告と結びついた新聞や雑誌などのメディアの影響もあり、「情報に通じ、実践する市民に対する民主的信仰(faith)によって、より一層〔文章を〕読まねばならないと人びとは確信していた」(IM, 131)。

世界の出来事がより身近に感じられるようになり、不況と戦争がいつでも始まりそうな恐れがあり、科学が目覚ましい速度で進歩を遂げる——これらすべてのことが、市民に、自分が知らねばならない多くの事柄を意識させた。情報に通じているという義務感を利用する雑誌自身が、市民の良心を刺激した。(IM, 131-2)

彼は、建国以来の民主化の歴史の延長で、技術発展と消費社会の到来に悼しながら、市民に「過

大な要求」が投げかけられる現状を描いてみせた。

ブーアスティンによると、過大な要求が内面化されるとき、市民＝消費者は、「全能感」(IM, 44)にも等しい「途方もない期待」を抱き、「矛盾したことや不可能なこと」すらも欲望する(IM, 4)。産業は、人びとの欲望を煽り、人びとは、消費を通じてどんな期待も満たされると信じている(cf. 松本, 2015)。欲望の肥大化は、その実、欲望の喪失でもある。社会に無数のモノと情報が流通し、それらの微差が広告的に強調されるとき、私たちは、途方もない欲望を抱いているつもりで、その実、広告によって自分の欲望を発見・拡大せねばならないほどに、自分たちが何を知り、意図し、求めているかを見失っている(IM, 232)。この自失状態は、経済だけでなく、社会や政治の領域にも広がっているとされる。人びとが、世論(具体的には世論調査)にますます関心を示し、それによって投票先への欲望を喚起しようとしているのはその兆候である(IM, 233)。

ブーアスティンは、リップマンの『世論』の発展形として自著を位置づけながら、政治報道がメディアイベント化して、消費活動のように政治が営まれている状態に危機感を表明した(IM, 233-4)。市民は、あらゆることに関心を抱き、その情報に通じていなければならないという「過大な要求」は、自己の望みを見失わせ、広告に頼って自己を見つめ直す《消費者的民主主義》をもたらしたのだ。政治的疎外がもたらす無力感は容易に全能感へと反転する。というのも、政治家でもあった社会心理学者のG. ウォラスが指摘するように、政治は広告的手法／発想を巧みに取り入れている(Wallas, 1948)ので、人びとは、広告的イメージの力を借り、それを鏡のように自己へと反射させることで、政治上の欲望をいくらかでも発見できるからだ¹⁰⁾。自己の欲望喪失と広告的欲望の過剰供給が共犯した結果、「全能感というアメリカ的な幻想」(IM, 44)が成立しているとブーアスティンは考えた¹¹⁾。

整理しよう。複雑化した社会状況を踏まえ、両者は政治的疎外に注目した。リップマンは、特に不能感から来るシラケに力点を置いたのに対して、ブーアスティンは、広告化する政治がもたらす市

民の全能感を問題視した。両者の時代診断は一見対照的だが、政治的疎外の原因が自己統治をめぐる理念と現実のギャップにあると考えた点で共通する。建国者たちが作り出した「過大な期待」を内面化した市民が疎外を経験することで、政治的有効感覚を失ってシニシズムに陥る場合もあれば、たまたま広告的に形作られた欲望を過大視して全能感に浸る場合もある。ただいずれも、人間の有限性を忘却した上に成り立つ態度なので、彼らが見出したのは、近代社会の抱える双子の病理であると言える¹²⁾。

3. 二人のジェファーンソン

人民の自己統治を育もうと努めてきた民主派は、「投票者は責任ある人物の知識や視点にできる限り漸近するべきだという想定がある」とリップマンは指摘する (TPP, 136)¹³⁾。しかし、常に「より多くの事実」(Ibid.) 知ることを市民に求めるのは、要求として過大であり、実際に人民がそう振舞ったこともなかったと彼は考えた。ここで彼が問題視するのは、「人民主権である」という神話を原則として立てながらも、同時に人民の自己統治能力を疑うという姿勢の不健全さである (cf. APT, 6)。幻想抜きに民主主義を模索したリップマンは、それに代わる理論を構築しようとした (cf. Schudson, 2018)。

公衆は、行政上の活動を行う誰かに、後から関わることで政治参加する局外者であり、党派的でしかありえず、「公衆の判断は、問題の事実のごく少数のサンプルに依存している」(TPP, 134-5)。要するに、「公衆の意見は、党派的で、発作的で、素朴な心性で、外在的である」(TPP, 141)。こうした性質を踏まえて、リップマンは、外在的な立場から「同意 (assent)」を提示することの、積極的かつ現実的な可能性を模索する (TPP, 106-8ff.)。それと並行して、多種多様な専門家が、公衆に検討材料や教育を提示するべきだと指摘し、役割分担の必要性に言及した (TPP, 135)¹⁴⁾。

こうしたリップマンの認識を共有しながら、デューイは自身の公衆論を組み立てた。つまり、自己統治のジレンマへの処方箋において、デューイ

とリップマンは大筋の合意に達している¹⁵⁾。けれども、興味深いことに、ジェファーンソンに対する距離感、つまり、アメリカ哲学の系譜のどこに自身を位置づけるかという認識において、彼らは決定的に異なっている。

リップマンは、人民が自己統治を支障なく遂行できるという神話の創作者としてジェファーンソンの存在をほのめかし、政治的疎外の思想的淵源を彼の平等主義に求めた (PP, 153ff.)。ブーアスティンがリップマンを下敷きに、「途方もない期待」に根差した消費者的主体を批判している以上、彼もまた、市民の自治能力を懐疑する議論において批判の矛先を実質的にはジェファーンソンに向けている。

それに対して、この両者に影響を与えた先行世代の知識人たるデューイは、ジェファーンソンを好意的に評価していた。デューイは、1943年開催の学会のプレスリリースのために原稿を書き下ろした (LW15, 366)。そこで語られるのは、科学的精神を軽んじる反知性主義的言説が盛り上がり、権威に追従する態度、「権威主義への逆コース」がアメリカ国内で前景化しており、「自由な探求と自由な教育の基礎」が損なわれているとの時代認識だった。この文章の締めくくりでは、ジェファーンソンを呼び出しながら、「自由な社会における民主的信仰と、科学的精神の本来的で奪い得ないつながり」の重要性が語られ、目を覆うような出来事に満ちた時代にあって、彼の知的遺産に学ぶべきところは多いという考えが示される。そもそも、この原稿以前に、1940年に公刊された選集『今に生きるトマス・ジェファーンソンの思想』にデューイは比較的長い解説を寄稿しており、彼の思想に詳細な検討を加えていた。ここでの再評価の中心にあるのが、民主主義という文化をアメリカに根づかせるのに生涯を捧げたジェファーンソンから彼が引き出した「信仰」概念である。かように、デューイはジェファーンソンから学ぼうとしている。

要するに、リップマンは、人民主権なる機能不全を起こした神話を作り上げた人物としてジェファーンソンを位置づけ、政治的疎外の犯人と名指したのに対して、デューイは、権威主義が吹き荒れる時代にあって、デモクラシーを立て直すため

に彼の知的遺産を相続せねばならないと考えた。以降では、「信仰」概念を中心に、プラグマティズムのデモクラシー論を検討する。それによって示されるのは、現代の具体的な政治の根源にある他者や世界との基本的な関係——「生のあり方としての民主主義」(LW14, 224-30)——を語るために、デューイはジェファーソンを召喚したということである。

4. ジェファーソンの構築的な反制度主義

デューイは、ジェファーソン論の6年前に書かれた宗教哲学で、二つの信仰モデルを提出した¹⁶⁾。何らかの対象(神など)の存在を信じる「知的信条(belief)」と、理想に権威を認め、それによって自身の言動を縛る「道徳的信仰(faith)」である(CF, LW9, 15)。道徳的信仰は、「私たちの活動的本性を何らかの理想的目的によって征服し、打ち負かすことを意味する。すなわち、その核心は、私たちの様々な欲求や目的に関する、その正当な要求を承認することを意味する。この承認は、実践的なものであって、元来知的なものではない」(Ibid.)。この言葉選びから示唆される通り、デューイが重視し、後のジェファーソン論で発展させたのは、「道徳的信仰」である。

両親を失った子どもを引き取らないための理由と正当化を親戚たちが口にし、責任を押し付け合っている現場に遭遇したとしよう¹⁷⁾。仮にあなたに故人を快く思わない気持ちがあり、他者が私的空間にすることが心理的につらく感じる気質があったとしても、それでもなお、こんな状況はおかしいと平気でいらなくなるかもしれない。そのとき、あなたは、実現されて然るべき可能性が実現されていないことを痛切に感じる。その思いが強ければ、自分の抱えている様々な事情や躊躇いを打ち負かしてでも、この状況を何とかしたいと何らかの行動を起こそうとするはずだ。このように、人は何らかの可能性に突き動かされるように行動することがある。デューイは、こうした経験を、想像力が経験から理想の萌芽(=可能性)を受け取り、その実現を自己へと命令することとして定式化した(LW9, 30)。彼の考えではここに

「信仰」と呼ばれるべきものがある。すなわち、「信仰」とは、今実現されておらず、完全に実現されることもない「理想」の実現に近づくよう、物理的・社会的環境を持続的に変えていく自己であることへのコミットメントだ(谷川, 2018)。

この信仰概念は、ジェファーソン論でも変奏される。まずデューイは、ジェファーソンが、農学・化学・植物学など領域横断的に知見を持つ人物であることに触れながら、理論と経験/実践の統一(LW14, 205)が彼の思想的特徴だと指摘する。

しかし、彼は——より慣習的な言い方をするならば——政治において非常に稀有な人物だった、つまり、極端なまでに広く多様な実践的経験によって、生来の信念が研ぎ澄まされ、調べられ、確かめられた理想主義者(an idealist)だった。(LW14, 202)¹⁸⁾

ジェファーソンは、人によって異なる描像が作られるほど思想が曖昧だとされる。しかしそれは、彼の「理想」が経験による不断の検証によって絶えず成長したことの表れだった。この意味で、人間の自然的平等という彼の発想、つまり、「ジェファーソンの民主的信仰」(LW14, 219)は、素朴なユートピア主義でなかった。具体的にはどういうことだろうか。

彼が起草に関わったアメリカ独立宣言では、すべての人間は平等であり、生命、自由、および幸福の追求といった不可侵の権利を有することを自明なものとして信じるという自然権的発想が展開された。しかし、理論と実践を統一したジェファーソンにあって、これは空理空論ではない。デューイは、そのニュアンスを伝えるべく一つの提案をする。

政府が依拠しており、政府が正当な権威を持つつもりなら従わなければならない「自然権」を擁護するとき、ジェファーソンは、時代に縛られた言葉遣いをしていた。今日それほど明白ではないのだが、ジェファーソンが法や権利との関連で用いるときには、意味を変えることなく、現代の読者により明瞭にするの

に、自然的という言葉と道徳的という言葉と置き換えることができる。(LW14, 212)

「道徳的」と置き換えることで、その実現に自己を駆り立てるような理想の存在をデューイはほのめかす。引用文直前での指摘 (Ibid.) を考慮に入れば、ここでの「理想」とは、自然権が追求するよう促す諸々の価値にほかならない。ここではそれを「自然権的理想」と呼ぶことにする。要するに、独立宣言は、アメリカという環境でジェファーンソンの想像力が捉えた自然権的理想の表現であり、デューイは「道徳的」という言葉を通じて自己と理想の強い結びつきを明示している。要するに、独立宣言には自然の権利という形で理想の実現に対する持続的なコミットメント (=信仰) が描き込まれているのだ。

彼は、法や制度の制定や経済的介入を通じて理想の実現にコミットした。ただし、そうした統治は、そもそも自然権的理想から権威を借りてはじめて正当なものでありうる。

あらゆる人間は自然的に平等である (natural equality) ということは、心理的な問題でも、法的な問題でもない。それは、創造主に対してあらゆる人間が保持する、等しく道徳的な関係——様々な道徳的要請や道徳的責任の平等性——の結果として、本来的に道徳的なのである。このように、実定法——ジェファーンソン言うところの国内法——と政治制度は、ある種の道徳的基礎と、道徳的規準ないし尺度を持っている。(LW14, 218-9)

統治の正当性は「理想」から得られたものであるがゆえに、政府によるその都度の制度的達成は、彼方なる自然権的理想を規準として評価されることになる。制度は様々な利害調整の下で暫定的に成立した妥協かもしれないし、現在の社会経済的状況には見合っていたとしても未来永劫そうだというわけでもないからだ (LW14, 216)。

これは明確に、デューイ自身の立場でもある (谷川, 2018)。教育を例に確認しておこう。R. ホフスタッターによると、「デューイのユートピア主義

は、何らかの理想的な教育システムの描像に基づいてはいなかった」(Hofstadter, 1963, 338=2003, 388)。デューイには、今ここになく、完全に実現されることもない理想への信仰がある点で、この理解は適切である。デューイは、彼が旗印となった「新教育」とも呼ばれる革新主義的な教育運動が、子どもを顧慮しない「旧教育」を乗り越える中で達成したものを点検した文章を書いた。その達成に確かに美点はあった。しかし結局は、批判していたはずの「権威主義的原則」を別の仕方でも生み出すこととなり、そしてそのことが「民主的社会的な様々な土台を捻じ曲げ、破壊し」たと総括する (Ibid., 340=390)。こうした評価の仕方に注目しながら、ホフスタッターは、知識人としてのデューイの態度を「適切な反制度的方法を制度化する何らかの方法の探究は続く」(Ibid.) と的確に要約する。現状の制度を常に疑いながら、権威的でない制度を構築するという理想を、彼は模索し続けた。

そしてこのフレーズは、そのままジェファーンソンの立場でもある。自然権的理想は到達しえないものとして掲げられており、現在における平等のあり様は、常に途上にあるのだが、しかし同時に、実践者としての彼は、様々な法律や仕組みを積極的に作っていた。要するに、ジェファーンソン＝デューイは、制度構築を厭わない反制度主義者として理想への「信仰」を自身の哲学に組み込んでいる。

5. 民主主義以前の「信頼」

そもそも、自然権的理想が彼方にある「理想」として、現状の暫定的達成を判断する「道徳的規準」になると同時に、平等に有するとされる自然権は、ある種の「道徳的基礎」としても振舞っている (LW14, 218-9)。というより、自然権とは通常「基礎」として理解されるはずだ。自然権が、ほかならぬ「人民」に奪い得ない仕方でも帰せられる以上、自然権が暗示する諸価値の現在における達成の基盤も、人民にある。だからこそ、ジェファーンソンは、人民の「幸福こそが、あらゆる社会制度の現実的かつ最終的な目的だ」と考え、それと同

時に、『人民の意志』を「あらゆる正当な政治的
取り決めの基礎」と捉えた(LW14, 210)。こうした
理論的道具立てから、ジェファースンが具体的に
推奨するのは、ジャーナリズムや公教育を通じた
啓蒙と人民による介入などである(APT, 34)。こ
うした具体的指針に対して、デューイはもちろん、
政治コラムニストだったリップマンも同意を示す
だろう。だとすれば、デューイとリップマンはど
こですれ違ふのだろうか。その分歧を指さす手が
かりは、ジェファースンの「人民への愛着」(LW14,
210)にある。

彼が駐フランス公使を務めた際、当時の指導的
な知識人との交流を持ちながらも、「彼の最も深い
共感は、彼が訪れ食事をともにした、虐げられた
大衆(masses)へと向けられていた」とされる
(Ibid.)。このことには、単に情感に訴える以上の
ニュアンスがあるとデューイは主張する。

統治の道徳的基礎たる人民の意志と、その統
制的目的たる人民の幸福とは、ジェファースン
とともに強固に確立されたので、共和主義
的立場に対する唯一の代替案は、人民に対する
信頼(trust)でなく、恐れ(fear)を持つ
ことだというのが自明となった。(LW14, 214)

この指摘は、基礎たる自然権をさらに根底で支
えるものとして「信頼」があるということを暗示し
ている。民主的社会であるためには、民衆への信
頼、自分自身も含む人民への信頼が必要だと
デューイは言う¹⁹⁾。デューイの「創造的な民主主
義」という講演には、人民への信頼についてのジェ
ファースンの議論と重なる箇所がある。

人間の平等に対する民主的信仰とは、才能の
量や範囲にかかわらず、あらゆる人間が、ほ
かの全ての人とともに、何であれ自分の持つ
資質を発展させるための平等な機会に対する
権利を持つという信念のことである。(LW14,
226-7)

人は誰であれ、それぞれの仕方で成長する権利を
持つと自然権的発想が言い換えられている。この

引用を経由することで、私たちは、人民への「信
頼」の内実を明確化することができる。

現実には、結果も機会も能力も平等ではないに
もかかわらず、自然的に平等な権利を人民は持つ
とされ、当の自然権を基礎としつつ、未完の理念
として自然権的理想は掲げられている。理想の実
現が常に未完であり続けるとしても、自然権的理
想へと社会が漸近するためには、自然権が名目だ
けの権利であってはならない。各人が、自然権を
生きる機会、つまり、「自分の持つ資質を発展させ
る平等な機会」が実際になければならないはずだ。
しかし、機会だけでは不十分である。そうした機
会だけでなく、自然権的理想への漸近を実際に生
きるための能力、つまり、各人がそれぞれの仕方
で自身の資質を開花させていく能力を持つと前提
せねばならない。デューイによると、「ジェファ
ースンの人民への信頼」とは、自然権的理想を生
きられるような「良識(common sense)」や「理性」
を人びとが持つと前提することである(LW14,
214)。要するに、極限に未完の理念として自然
権的理想が暗示され、その実現のために邁進する
という「信仰」が存在するのだとすれば、そうした
信仰を生きるための能力が人間にはあると想定せ
ざるをえない²⁰⁾。「信頼」と呼ばれたのは、公理の
ようにそれを信じる態度のことであり、これなく
して自然権という発想は機能しえない。従って、制
度構築や取り決めなどの政治実践が民主的であ
ろうとする際の可能性の条件になっているがゆえに、
自然権は、そしてその前提にある信頼は、(理想と
して規準になるだけでなく)「基礎」でもあると言
われるのだ(LW14, 210)

デューイは、ジェファースンとともに、「信頼」
を、民主的統治の基礎たる自然権の更に根底にあ
る基礎として置いた。人間が成長していく機会を
持つべきであり、それを追求する能力を持っている
という「信頼」——「人間の平等に対する民主的
信仰」(LW14, 226-7)——がなければ、デモクラ
シーは機能しえない。そう指摘することによって、
ジェファースンの時代における「統治の不安」、そ
して、その現代的な変種である、リップマンやブ
ーアスティンが危惧した「市民への過大な期待」の
問題が実際に解決されるわけではない。むしろ、デ

モクラシーを掲げる以上は、人は誰であれ平等に、自然権が示唆するような資質を発展させる機会と能力を持っていると前提せざるをえない、ただそのことをデューイは確かめたのである。

こうして民主主義を根源的に掘り下げて議論を展開したことには、明確に時代的な背景がある。本論で扱ったデューイの議論——宗教哲学、ジェファーンソン論、創造的民主主義——は、現実的な脅威として世界を席卷していた「全体主義」と、国内でも押し留めがたく拡がり、人びとに声押し殺させた「権威主義」が台頭する時代に書かれた(LW15, 366)。人間を対等に扱わず、抑圧や暴力で専制的に支配しようとする姿勢に対して、デューイは、抑制的だが力強く反対する。

人間が共有する本性への信仰を再生すること……は、実際に物質的に成功したり、特定の法的・政治的形態を熱烈に崇拝したりすること以上に確かな、全体主義に対する防波堤である。(LW14, 220)

ジェファーンソンに仮託しながら、「恐れ」と「信頼」を対置したことの背景には、二度の世界大戦がデューイに突きつけた全体主義や権威主義という問題があった。それに取り組む中で、デューイは、「民主主義」と「全体主義」は、単なる政治制度上の対立ではなく、生のあり方の対立だと考えるようになった。つまり、人びとや世界を「信頼」するか、すべてを「恐れ」て自身をあらゆるつながりから孤絶した存在と捉えるかという人間観の問題である。不安や恐怖の先には、人間の自然的な対等性を破壊し抑圧する権威主義や全体主義、そして、あらゆる事柄を個人化して他者への配慮を進んで放棄する社会ダーウィニズムが待ち構えている。だからこそ、「民主主義は、人間本性の様々な可能性に対する生きた信仰によって統制された生のあり方のことである」(LW14, 226)とデューイは口にした。この「信仰」なくして民主主義は機能しえないという意味で、彼が語っているのは、市民が実質的に民主主義を担いようかどうか以前の話である。

ジェファーンソン＝デューイは、理想の現状にお

ける達成の規準として自然権を位置づけただけでなく、それを支えるものとして民衆への信頼を置いた。彼らのデモクラシー論に対する貢献は、人民の自然的な平等(＝自然権が示す理想を生きる機会と能力を人間が持つ)という「信頼」なくして、民主主義は機能しえないのだと「民主的信仰」を定式化したことである。「信頼」と「恐れ」という二つの選択肢のうち、民主主義を維持したいならば、前者の道を選ぶほかない。形式的な自由の整備だけでは無為であり、むしろ、人びとが自由を行使できるようになるための「経済および文化的な資源」を育てる必要があるという発想を、ある思想家は、デューイとジェファーンソンに帰した(クロッペンバーグ, 2011, 257-61)。デューイは、ジェファーンソンという知的遺産を継承しながら、自然権と人民への信頼の構造を描き直すことで、よりラディカルな民主主義のための文化的資源をアメリカに思い出させ、民主主義への「信仰」を根づかせようとしたのである。

6. デューイ哲学の楽観性が意味するもの —— 恐れと信頼という分岐

リップマンは、本来の平等性に立つジェファーンソンの修辞が、統治能力の現実的な不平等を覆い隠し、人民に過大な要求を突きつけることになると危惧し、彼を起源とする民主主義の神話を批判した。しかし、ジェファーンソンの仕事は、現実の不平等(自然の貴族制)が不可避であるにもかかわらず、人間がそれぞれ与えられた資質を十全に伸ばす権利と能力があるというヴィジョンを提示することだった(LW14, 210-1)。彼が独立宣言などで語ったのは、法的平等性でも心的能力の等質性でもなく、自然権的理想と人間の関係のあり方であり、民主主義が前提せざるをえない「人間への信頼」である(LW14, 218-9)。「自然的平等」は、リップマンらのように、現実の具体的な政治シーンへの応用を待つ概念ではなく、民主的社会的な道徳的基礎であると同時に、規準として現状の私たちの行動を統制する未完の理念として理解されなければならない。要するに、彼らは、市民に対する「過大な要求」の黒幕を突き止めたというより、

議論の水準を見誤っていた。

それに対して、デューイは、ジェファーソンが時代遅れだとみなされる同時代の状況を危惧した。むしろ、「既存の様々な経済-法的制度で育まれた格差の観点から個人の自由を定義するような、いわゆる厳めしい個人主義²¹⁾の影響下で、生活の着想から流れ去った名目だけのデモクラシー (nominal democracy) が生じている」状況において、ジェファーソンは意識的に立ち返るべき知的遺産である、と主張した (LW11, 370-1)。デューイは、彼が人民を信頼したこと、つまり、人間本性に根本的な信頼を置いていたと指摘する。信頼は生き方の問題であるという意味で、政治体制としての民主主義よりも深く民主主義という理念に結びついており、リップマンらはこの点を見落としている。その意味で、デューイは、不能感と全能感という二つの病理を問題視したリップマンらよりも根源的な水準で、自己統治をめぐる政治の不安に応答するものである。

ところで、デューイらが繰り返した「恐れ」なき人民への信頼という論点は、度々繰り返されてきたプラグマティストに対する批判を思い出させる。すなわち、プラグマティズムは、悲劇や悪徳に無感覚な楽観主義だというラベリングである。スタンリー・カヴェルや鶴見俊輔は、デューイの思想がそうした楽観主義の典型であるとみなした (Cavell, 1996; 鶴見, 2008, 200-1, 250-1)。彼らは、憂鬱や悲哀により直截的な共感を示す W. ジェイムズを高く評価してデューイの対岸に置くことで楽観主義というイメージから守り、プラグマティズムを分断しようとする。

しかし、恐れに信頼を対置し、後者を選ぶというジェファーソンの態度は、デューイ自身の手によってジェイムズの思想と重ねられることは興味深い。未公刊資料を盛り込んだ R. B. ペリーの大部のジェイムズ論 (Perry, 1935) を評した論文の中で、デューイは、ジェイムズ哲学の核心をこう説明する。

根本的には、結局のところ、個人が自分の生きる世界と何らかの生きたつながりを持っており、このつながりは、究極的には二種類し

かないのだと言わねばならないだろう。すなわち、個人を抑圧するようにつながりか、個人を支え、鼓舞するつながりのいずれかである。妥当性を示すような合理的根拠を欠いているとしても、道徳的に考えると、私たちに、行為の目的のために後者の態度を選ぶ権利がある。当の信念が妥当でないと示す有無を言わせぬ証拠が存在しないなら、世界にある何かが、私たちの理想的な願望を満たしてくれて、その実現を積極的に支持してくれているという想定に基づいて、私たちは、勇気をもって生き、行為することを選んでよい。(LW11, 475)

世界そのものが理想の実現を支えてくれるかのように行為する前向きさは、もし私たちが精神的に孤立せずに生きようとするなら、前提しなければならない「生のあり方」である。この前提に、絶対的な論証や正当化を与えることはできない。その前向きさを選ぶよう促されるのは、異なる他者と共存し、理想のために生きるためには、悲観して孤立的人間観に陥って世界を恐れる——その結果、何らかの権威に依存して他者や自己自身を抑圧する——よりも、世界や他者が自己を支えていると楽観した方がいいからである²²⁾。

この二者択一は、社会ダーウィニズム的な孤立主義につながりかねない悲観よりも、積極的な根拠がなかろうと世界に対して鷹揚に構える態度を促している。この分岐は、人びとや世界に対する根本的な「信頼」へと導くのだが、それは他者と共生するために公理のように前提するほかない (LW14, 224-30)。その開き直りを「楽観」と呼ぶことができるとしても、デューイが提示しているのは、捨て鉢でも鈍感さでもない。他者や世界から切断され、不安と敵意を伴った憂鬱をもたらす「悲観」という選択肢との比較の上で、切迫感とともに選び取られた楽観性である。このことは、生のあり方の問題として、民主主義と全体主義が対置されたことから確かめられる (LW14, 226-7)。

こうしてデューイが定式化した分岐は、R. ロータイが好んで持ち出した「連帯」(民主主義)と「客観性」(プラトニズム)という構図を思い出さ

せる。

プラグマティストは、自分たちの共同体との連帯を望んでいる。そして、客観性への願望を、すなわち、自分たちの共同体を超えるような実在に触れていたいという願望を、この連帯への願望に置き換えたいと望んでいる。彼らの考えからすれば、科学者が持っている徳というのは、力よりも説得に信頼を寄せ、同僚の意見を尊重し、新たなデータや考えに関心を持ち、あるいはそれらを熱心に求めるという、そうした習慣にほかならない。(Rorty, 1990, 39)

他者や自然との継続的な会話に賭け金を置くか、世界と何のつながりも持たない絶対的確実性を信じるかという岐路として、ローティはデューイの問題系を引き受け直した。

この主題においてローティとデューイを近づけることで浮かび上がるのは、基礎づけ主義の「臆病さ」が、人を信じることへの「恐れ」と重なることだ。ローティによると、プラグマティックなロマン主義は、「自分たちの有限性を進んで認められない臆病さ」とは無縁である(Rorty, 2007, 110)。絶対的な基礎づけなどでできず、不完全だが当座の確実性を手に生きるほかないにせよ、私たちは他者や世界とのつながりを感じながら、幾ばくかの創造性を発揮することができる。この有限性を引き受けるあり方は、理想を抱いて反制度主義に立ちながら——今ここに理想があるとは言わずに——当座の制度構築／改善に取り組んで、暫定的な達成を成すような人間の可能性に賭ける態度である。そこに掛け金を置かなければ、全体主義的な生のあり方、人間への恐れや絶対的客観性への欲望に絡めとられてしまう。ローティとデューイは、ジェファーンソンやジェイムズとともに、生の不安や憂鬱に対抗するには、人間への信頼を公理のように前提するほかないと考えた。

デューイは、信仰概念を提出した宗教論で、自然や他者を含む世界との精神的なつながりを感じることと、「人間本性の尊厳を感じることを」ともに「宗教的」なものだと呼びながら、これをロマ

ン派詩人 W. ワーズワースのイメージで包んだ(LW9, 18; 谷川, 2017a)。このことを考慮すれば、プラグマティックなロマン主義者という描像は、デューイ哲学への適切なラベルである。こうした発想の下で、デューイがジェファーンソンから導き出したのは、自己統治のジレンマを解決するものではなく、むしろそれを解消しえない「政治の不安」として鷹揚に引き受けながら、人間の可能性を信頼し、意識的に楽観する生き方である。民主的に生きるためには立ち向かい続けねばならないが、有限な私たちには、政治の不安を根本的には解消できない——この情熱的で楽観的な諦念を表現するのに、「信仰」ほど適切な言葉はないと思われる。

注

- 1) 本稿では、ジェファーンソンを知的遺産として好意的に扱うが、彼は奴隷解放の理念を語りながらも、明確に黒人差別的な言動をしてもいたことは注記しておきたい(早瀬, 2017)。彼は奴隷を所有し、黒人奴隷サリー・ヘミングスとの間に子どもをもうけたといった事実で知られている。また、白人に比べて黒人の理性や見た目が生来劣っていると述べたこともある(Jefferson, 1853, 149-51)。
- 2) リップマンとデューイは互いへの影響関係があり、ブーアスティンは両者からの影響を公言しているという影響関係である。
- 3) 当時の都市の雰囲気や移民事情などは、一定の考証とともに北野詠一『片喰と黄金』(集英社)に印象的に描かれている。詳細は、貴堂(2019)および中野(2019)の叙述を参照のこと。
- 4) 19世紀半ばから20世紀前半にかけて、アメリカの社会・経済的事情がもたらした「不確実性」の増大に対するアメリカ知識人の応答については、別稿で検討した(谷川, 2019a)。
- 5) 種々の決定論の流行から来る悲観主義的気分は、「19世紀の悪夢」とも呼ばれる(Gallie, 1952, 23-4)。
- 6) どのような教育的アプローチも、時代変化を先回りして具体的な政治問題を教えることができない以上、結局、過大な要請に十分応えることはできないという指摘があるように、市民に違う仕方でもアプローチしたところで、過大な期待には応えられないとリップマンは考えていた(TPP, ch.2)。
- 7) 國分(2015)は、政治における行政的側面の拡大によって人民が統治から疎外されていく様を政治哲学の観点から追跡しようと試みている。
- 8) 社会心理学者の G. ウォラスに由来する概念(Graham, 1914)。産業化がもたらした社会変動

- を調査した研究において提示され、それ以前の時代との断絶を強調すべく作られた、複雑かつ大規模化した社会を表現する言葉。集約的な生産体制を指す「大産業 (Great Industry)」から造語されているので、集権的であるとの含意もある。なお、この本の前書きは、リップマンへの手紙の形式になっており、彼への感謝が語られている。
- 9) ブーアスティンの消費社会論全般については、別稿を参照のこと (谷川, 2019b)。
 - 10) Bernays (1928=2019) は、当時の社会心理学の——つまり、デューイやリップマンの——影響下で、世論操作や PR を行い、プロパガンダを展開していた。マーケティング化した現代の選挙戦については、渡辺 (2010, 70-82) の議論が参考になる。なお、鏡の比喩は、ブーアスティンが消費社会論で多用していた (cf. 難波, 2011)。
 - 11) Andersen (2018=2019) は、「全能感というアメリカ的幻想」の視点から歴史を 500 年に亘り振り返った。全能感を満たす幻想の中に住むことを支援する宗教・政治・社会現象が、アメリカでは通奏低音のように流れているとの観点から同書は書かれている。
 - 12) 彼らの議論は、いずれも「知る」要求の過大視を問題にしているので、欠如モデル的な啓蒙に対する批判として位置づけられる。
 - 13) 「証拠に関するよりよい感覚を授ける」(PO, 8) ことを主張するなど、今日で言うメディアリテラシーの涵養を追求したように、リップマンは民主主義にとっての教育の重要性を否定しない (cf. PO, 219)。
 - 14) 具体的には、「サンプリングの方法を開発し、判断の基準を規定する政治学者」、「これらの方法の使用を公衆に伝える民主的社会における公民教育」を行う者、「それらに配慮すべく制度を作る人」(=公職者) などが挙げられている (TPP, 135)。
 - 15) ブーアスティンはこのジレンマに直接解決策を提案していない。しかし、消費社会の問題について言えば、彼は社会内在的に新たな意味地平を切り開くような「世界開示的批判」(Honneth, 2000=2005) を遂行することで応答している (IM, 261)。この論点については、彼の「触媒」概念に注目しつつ、別稿で詳論している (谷川, 2019b)。
 - 16) デューイの信仰概念と、宗教哲学全般については、別稿を参照 (谷川, 2017a)。
 - 17) ヤマシタ (2017) のエピソードを借りた。姉を恨みに思う感情、人と過ごすことへの心理的負担にもかかわらず、主人公は、親戚をたらい回しされていた姪を家に引き受けることに決める。「あなたは、15 歳の子供は、こんな醜悪な場にふさわしくない。少なくともわたしはそれを知っている。もっと美しいものを受けるに値する」と彼女は語る。
 - 18) 「生来の信念」という言葉で、ジェファーソンが、時代や教育から受け取った抜きがたい諸々の発想が念頭に置かれているようである。具体的には、フロンティアで特徴づけられるアメリカ的事情 (新しい国家において、社会的に有用な知見の普及が急務であること) と、18 世紀啓蒙主義 (教育と全般的な教育の必要性) からジェファーソンが受けた影響のことだと思われる (LW14, 210)。
 - 19) この図式は、暗に「投票」と結びつけながら、政治を語っていたリップマンやブーアスティンとは好対照を成している。
 - 20) プラグマティストを自認するセネットが提示したプラグマティズム観もまた、「遊戯の普遍性、つまり、限定し、疑問を持ち、打開するという基本的なケイバビリティ」がエリートに限らず、広く人類に行き渡っていることを議論の前提に置くものであり、本稿の見解に通じる (Sennett, 2009, 291)。セネットはこの主張をジェファーソンと紐づけてもいる (Ibid., 269, 274)。
 - 21) デューイは、ジェファーソンの時代の古い個人主義と、複雑かつ大規模化した社会、つまり、大衆社会において求められる新しい個人主義とを対比している。上流階級を中心とする (格差を伴うような)「厳めしい個人主義 (rugged individualism)」(LW5, 58) がアメリカにはかつて存在していたものの、それは、産業化と「ある種の貨幣文化」(LW5, 45) の到来によって機能不全を起こしている。それゆえ、新しい仕方でも「個性性」ないし「個人主義」を仕立て直し、社会的統合と調和した個性性を確立する必要があるという議論が展開される (LW5, 80-1 など)。

参考文献

- デューイ著作集は慣例に倣って表記する。例えば、(LW9, 9) は後期 9 巻 9 頁を指す。
- Boydston, J. A., ed., *The Collected Works of John Dewey: The Later Works, 1925-1953*, vols. 1-17, Southern Illinois University Press. [LW]
- また、以下の著作は略号で表記する。
- Boorstin, D. J., *The Image: A Guide to Pseudo-Event in America*, reissue edition, Vintage, 1992. [IM]
- Lippmann, W., *The Phantom Public*, Dover, 1993. [TPP]
- Lippmann, W., *Public Opinion*, Dover, 2004. [PO]
- Menand, L., *Metaphysical Club: A Story of Ideas in America*, Farrar Straus & Giroux, 2002. 野口良平、那須耕介、石井素子訳『メタフィジカル・クラブ』みすず書房, 2011. [MC]
- ホフスタッター, R., 田口富久治・泉昌一訳『アメリカの政治的伝統: その形成者たち I』岩波書店, 1959. [APT]
- Andersen, K., *Fantasyland: How America Went Haywire: A 500-Year History*, Ebury Press, 2018. 山田美明、山田文訳『ファンタジーランド: 狂気と幻想のアメリカ 500 年史』上下, 東洋経済新報社, 2019.
- Bernays, E., *Propaganda*, Horace Liveright, 1928. 中田安彦訳『プロパガンダ』成甲書房, 2010.
- Boorstin, D. J., *The Decline of Radicalism, Random House*, 1969.
- Cavell, S., "What's the Use of Calling Emerson a

- Pragmatist,” *Cardozo Law Review*, vol.18, no. 1, 1996, pp. 171-180.
- Gallie, W. B., *Peirce and Pragmatism*, Penguin Books, 1952.
- Hofstadter, R., *Anti-Intellectualism in American Life*, Vintage Books, 1963. 田村哲夫訳『アメリカの反知性主義』みすず書房, 2003.
- Honneth, A., *Das Andere der Gerechtigkeit*. Suhrkamp, 2000. 加藤泰史・日暮雅夫ほか訳『正義の他者』法政大学出版局, 2005.
- Jefferson, T., *Notes on the State of Virginia*, a new edition, J.W. Randolph, 1853.
- Jefferson, T., *Thomas Jefferson on Democracy*, selected and arranged with an introduction by S. K. Padover, New American Library, 1939.
- Menand, L., *Metaphysical Club: A Story of Ideas in America*, Farrar Straus & Giroux, 2002. 野口良平, 那須耕介, 石井素子訳『メタフィジカル・クラブ』みすず書房, 2011. [MC]
- Perry, R. B., *The Thought and Character of William James: as revealed in unpublished correspondence and notes, together with his published writings*, vols. 1-2, Little, Brown and Company, 1935.
- Rorty, R., *Objectivity, Relativism, and Truth: Philosophical Papers vol.1*, Cambridge University Press, 1990.
- Rorty, R., *Philosophy as Cultural Politics*, Cambridge University Press, 2007.
- Schudson, M., “The ‘Lippmann-Dewey Debate’ and the Invention of Walter Lippmann as an Anti-Democrat 1986-1996,” in *International Journal of Communication*, vol. 2, 2018, pp. 1031-42.
- Sennett, R., *The Craftsman*, Penguin Books, 2009.
- Wallas, G., *The Great Society: A Psychological Analysis*, The Macmillan Company, 1914.
- Wallas, G., *Human Nature in Politics*, 4th edition., Constable, 1948.
- 貴堂嘉之『南北戦争の時代 19世紀』岩波書店, 2019.
- クロッペンバーグ, ジェイムズ, 古矢旬・中野勝郎訳『オバマを読む: アメリカ政治思想の文脈』岩波書店, 2012.
- 國分功一郎『近代政治哲学: 自然・主権・行政』筑摩書房, 2015.
- 谷川嘉浩「A *Common Faith* はなぜそう呼ばれるか: ジョン・デューイ宗教論の共同性に関する研究」『アルケー』vol. 25, 2017a, pp. 67-78.
- 谷川嘉浩「消費の時代に『理想』を再構築すること: プーアスティン, デューイ, ニーバー」『人間存在論』vol. 24, 2018, pp. 93-106.
- 谷川嘉浩「宗教原理主義が生じた背景とはどのようなものか」『今からはじめる哲学入門』, 戸田剛文編, 京都大学出版会, 2019a, pp. 63-85.
- 谷川嘉浩「プーアスティンは消費者の粗雑な類型論を展開した本質主義者だったのか: D. プーアスティン観光論/消費社会論の批判的再構築」『人間・環境学』vol. 28, 2019b, pp. 119-33.
- 鶴見俊輔『たまたま, この世界に生まれて: 半世紀後の『アメリカ哲学』講義』編集グループSURE, 2007.
- 鶴見俊輔『アメリカ哲学』こぶし書房, 2008.
- 中野耕太郎『20世紀アメリカの夢: 世紀転換期から1970年代』岩波書店, 2019.
- 難波功士『メディア論』人文書院, 2011.
- 早瀬博範「ジェファソンは偽善者か?: アメリカ民主主義と奴隷制」『佐賀大学教育学部論文集』1(2), 2017, pp. 2-32.
- 松本悠子「消費文化の成立: 大量消費社会におけるジェンダー・地域・人種」, 常松洋一, 松本悠子編『消費とアメリカ社会: 消費大国の社会史』山川出版, 2005, pp. 99-140.
- 森本あんり『反知性主義』新潮社, 2015.
- ヤマシタトモコ『違国日記』vols. 1-6, 祥伝社, 2017-20.
- 渡辺靖『アメリカン・デモクラシーの逆説』岩波書店, 2010.

On Jeffersonian “Faith” in Democracy: Political Alienation, Natural Rights, and Pragmatist Trust

Yoshihiro TANIGAWA

Graduate School of Human and Environmental Studies,
Kyoto University, Kyoto 606-8501 Japan

Summary Thomas Jefferson explored the ideal of democracy as he confronted the social changes, such as commercialization and urbanization, that modernization necessarily includes. W. Lippmann, D. J. Boorstin, and J. Dewey, being intellectuals of 20th-century America, shared experiences of upheaval similar to the above. Nevertheless, their democratic views, and so their views on Jefferson, are quite different. By investigating this point, I will try to clarify the fundamental dilemma of “self-government” and its origin, and reveal the substance of radical democracy in pragmatism. In Dewey’s philosophy, natural rights work as a controlling ideal and serve to facilitate the “trust in people” that is a precondition of democracy. This argument helps us to see why some condemn his philosophy as “optimistic”. Yet, the supposed optimism of Dewey can be understood as the style of philosophizing he adopted to address the urgent sense of crisis prevalent in the political circumstances at that time.